

聖書:士師記4章1～10節

説教:あなたが一緒に行ってくださいなら

はじめに

イスラエルの民がカナンの地にまさにこれから入るといふときに、ヨシュアが「あなたがたは神である主に仕えるのか」と問いかけたところ、民がたちは力強く「私たちは主に仕えます」と告白し、そのことばのとおり、荒野を旅してきた世代はこの約束を守ることができたのですが、彼らの子どもの世代、孫の世代に移ると様子が変わってしまいます。カナン人が信じていたバアルの神々を初めとする様々な神々に心を引かれ、簡単に主である神を捨てて、1節にあるように、「イスラエルの子らは、主の目に悪であることを重ねて行っ」てしまいます。

そのように心変わりしていったイスラエルに対して、2節にあるように「主は、ハツォルを治めていたカナンの王ヤビンの手に彼らを売り渡され」ます。そのヤビンは、イスラエルに毎年貢ぎ物を納めるように命じます。納めなければ殺されます。たとえ納めても、これでどうやって生きていけというのかという程にしか残らない。そんな生活が続いたとき、あまりの苦しさから神に助けを求めました。イスラエルが主の目に悪であることを行い、それで主が敵の手に売り渡し、その結果イスラエルが主に叫び求める。このようなパターンはこれまで何度も繰り返されてきました。主に叫び求めるとき、主はイスラエルを救います。主に逆らった者たちをなぜ主は救うのか。そこにどんなみこころがあるのか。ともに見てまいります。

1 売り渡されるイスラエル

1) カナンの王ヤビンと軍の長シセラ

イスラエルがこの苦しみから逃れるためには、敵を倒すしかありません。でも敵の軍隊のリーダーであるシセラは鉄の戦車九百台を持っています。これは何を意味するか。当時、イスラエルは鉄を作る技術を持っていなかったということがここを理解するポイントになります。例えばこういうことです。かつて日本がアメリカと戦争をしていたとき、最後は女性たちに竹槍を持たせて戦おうとしたことがあります。イスラエルもこれと似ています。敵は馬に鉄の戦車を引かせて高速で走り回って矢を放てくる。こちらは粗末な武器を手にしながらのろのろと自分の足で歩くしかない。これでは

だれが見ても力の差は歴然で勝ち目がないわけです。

2) 主に叫び求める

それで彼らはどうしたか。いろいろな神々に助けを祈り求めました。まずバアルの神々に祈った。バアルがだめなら、アシュタロテの神々。それがだめならあの神のこの神。そうやっていろいろな神々に願っても何も起きない。とうとう二十年経ってやっとイスラエルの子らは彼らの先祖が信じていた主に叫び求めました。

余談になりますが、あるお菓子の包装紙に「受験生あるある」という文字があつて、その横に「お守りがどんどん増える」と印刷されていました。まさに苦しいときの神頼み、受験生もイスラエルも同じことをしています。

2 女預言者デボラ

1) デボラの祈り

さて、神はイスラエルの叫びに答えてくださり、女預言者デボラをさばきつかさとして与え、長老たちはデボラの所にやって来ていろいろ相談していました。ここを読んでお気づきだと思いますが、女性だから低く見られるということはありません。

その長老たちは、カナンの王であるヤビンに苦しめられていることを語ります。聞いていたデボラもずっと心を痛め祈っていたことでしょう。ヤビンの問題がなぜイスラエルに降りかかってきたのか、預言者としてその理由は当然わかっています。主を捨ててバアルの神々に誘惑され、主の目に悪であることを行つた結果でこうなった。だから彼らが主に立ち返らない限り、この苦しみは続くだろう。ですから、彼らが主に立ち返ることができるように。そう祈つたはずで。

2) バラクを呼び出す

そんなあるとき、デボラは主からの語りかけを聴くことになります。6節、7節。「あるとき、デボラは人を遣わして、ナフタリのケデシュからアビノアムの子バラクを呼び寄せ、彼に言った。「あるとき、デボラは人を遣わして、ナフタリのケデシュからアビノアムの子バラクを呼び寄せ、彼に言った。「イスラエルの神、主はこう命じられたではありませんか。『行って、タボル山に陣を敷

け。ナフタリ族とゼブルン族の中から一万人を取れ。わたしはヤビンの軍の長シセラとその戦車と大軍を、キシオン川のあなたのところに引き寄せ、彼をあなたの手に渡す』と。」

確かにイスラエルの子らは苦しみの中から主に叫び求めました。でもそれはほんとうに主に立ち返ったと言えるのか。もっと自分たちのしてきたことを見つめるべきでないのか。デボラがそこまで疑問に思ったかどうかは分かりません。でも、読んでいる私たちはそう思ってしまいます。ところが主が語られたことは、主は戦いの前面に立ってくださってイスラエルを救ってくださる。そのためにバラクを呼べ。それが答えでした。いったいなぜなのか。それは後で触れることにします。

3) 三つの戦略を示す

デボラがバラクに語った内容は非常に具体的で、三つあります。一つ目。タボル山に陣を敷け。タボル山はガリラヤ湖の西側にあつて平野の中に五百メートルくらいの高さのある、きれいなお椀の形をした山です。なぜそこであるのか。ここだけからは分かりません。しかし何か意味がありそうです。

そして二つ目。戦う戦士はナフタリ族とゼブルン族から一万人を集めなさい。ナフタリ族もゼブルン族もやはりガリラヤ湖の西側に住む人たちですから、どこにどんな山があり谷があり川があり道があるか全部知っています。これかは確かに理にかなった判断です。

三つ目。敵の軍隊と大将であるシセラをキシオン川に引き寄せなさい。そこで決着をつけることになる。キシオン川はやはりガリラヤ湖の西にあつて地中海に向かって流れている川です。数年前にイスラエルに行かせていただいたときに実際にキシオン川を見てきましたが、川幅は十メートルもないようでした。そんな小さな川がなぜ決戦の場になるのか。やはりここからだけでは分かりません。4章の後半で戦いの場面が描かれていますが、そのときにもう一度なぜ神がこのような指示をされたのかを考えていくことにします。

3 バラクの信仰

1) 「あなたが私と一緒に行くならば」

さて、ここでバラクの立場になって考えてみましょう。デボラから、この三つの戦略に従えさえすれば、主は敵をあなたの手に渡してくださると言われました。さあ、こんなときどう判断すべきでしょうか。もし彼がずぶの素人であったならば、

主がついてくださるならば大丈夫に違いないとあまり悩まずにお任せできたかもしれない。ところが、彼は専門家です。敵は馬に引かせた九百台の戦車をもって襲ってくる。こちらは竹槍のような粗末な武器しかない。どう考えてもこの戦いに勝てるとは思えない。自分の智恵はあまりにも危険だと警告する。しかし信仰においては従うべきだとも思う。その狭間で悩んだ末に彼はこのように言います。8節。「バラクは彼女に言った。「もしあなたが私と一緒に行ってくださるなら、行きましょう。しかし、もしあなたが私と一緒に行ってくださらないなら、行きません。」」

2) 主は女の手で…売り渡されるから

デボラはこのように応えます。9節。「そこでデボラは言った。「私は必ずあなたと一緒にいきます。ただし、あなたが行こうとしている道では、あなたに誉れは与えられません。主は女の手でシセラを売り渡されるからです。」こうして、デボラは立ってバラクと一緒にケデシュへ行った。」

イスラエルを苦しめる敵を倒すことになれば、その榮譽はもちろんバラクが手にします。彼もそのつもりだったでしょう。ところが「あなたが行こうとしている道では、あなたに誉れは与えられません」と言われてしまいます。どうしてこんなことが言われるのか。バラクは敵と戦う条件として、デボラも一緒に行かなければ自分は戦わないと条件をつけました。そのことが関係しています。完全に主を信じ切れないから条件をつけた。その結果、「あなたが行こうとしている道では、あなたに誉れはあたえられません」と言われてしまいます。

戦士、兵士はいのちを賭けています。それでも戦場に赴くのは、それに見合った榮譽が与えられると約束されているからでしょう。でもあなたが敵を倒したとしてもなんの榮譽も与えられない、と言われたらどうしますか。それも「主は女の手でシセラを売り渡される」とも言われる。「女の手」とはデボラのこと、デボラが榮譽を独り占めするのか。普通そこまで言われたら戦う意欲をなくすでしょう。ではバラクはどうしたか。デボラがいつしよに行くと言ったのを聞いて、戦場に向かう決心をします。バラクの中に何か大きな変化が起きたものと考えられます。

3) 譽れを捨てた主が先立つ

イスラエルの子らが主の目に悪であることを行ったのに、主に叫び求めたら、主は彼らを助けようとされる。いったいなんのためにそんなこと

をするのか。ただかわいそうだから助けて上げた。そんな行き当たりばつりの神なのでしょうか。バラクは自分には栄誉を与えられないと知っただけでいながらなぜ戦場に赴いたのか。二つの疑問が残ります。

神は行き当たりばつりの神ではありません。神がデボラに敵とどのように戦うのか、詳細な戦略を示してくださったように、神はイスラエルを導こうとするときにも確かな戦略をもって導きます。

バラクがどのような所を通っていくのか、よく見てください。主の約束を信じ切れないバラクに対し、デボラは自分もいっしょに行くと言いました。それは何を意味するのでしょうか。デボラは戦場から遠く離れたなつめ椰子の木の下に座っていました。そこにいる限り安全です。でもデボラは戦いの場に赴き、戦いに負ければ殺される。そのような場に身を置くことを決断したということです。後で分かりますが「女の手でシセラを売り渡される」とは、デボラのことではなく、まったく別の女性を指しています。

ここに主の姿が見えてきます。神は奇跡を通してイスラエルを救うだけではない。神がその時どのような所を通るのか、イスラエルに教えます。バラクは神を疑いました。しかしデボラが自分もいっしょに行くのだと言うのを聞いたとき、デボラの後ろに立っておられる救い主の姿を見ることになります。救い主はイスラエルを救う。しかしこの方は安全なところに立ってただ見守っているのではない。主ご自身が戦いの先頭に立ち、本来受けるべきすべての栄誉をお捨てになる。バラクがあなたには栄誉は与えられないと言われても、前に進むことができたのは、この主の姿を知ったからだと思われまます。

主は同じように私たちにも関わってくださいませ。主に逆らい続けて罪を犯し続ける私たちですが、主はあきらめません。苦しみの中に置かれたとき、主も苦しみが一番先頭に立ってください。一緒に苦しんでくださる。私たちを救うためにすべての栄誉をお捨てになり、十字架でいのちをお捨てになられる。その十字架がはっきりと見えるように、神は私たちを導き続けてくださいます。